

# 予が半生の懺悔

二葉亭四迷

青空文庫



私の文学上の経歴——なんていっても、別に光彩のあることもないから、話すんなら、寧いっそ私の昔からの思想の変遷とでもいうことにしよう。いわば、半生の懺悔ざんげ談だね……いや、この方が罪滅しになって結句いいかも知れん。

そこでと、第一になぜ私が文学好きなぞになったかという問題だが、それには先ずロシア語を学んだいわれから話さねばならぬ。それはこうだ——何でも露国との間に、かの樺太かばふとちしま千島交換事件という奴が起つて、だいぶ世間がやかましくなつてから後、『内外交際新誌』なんてのでは、盛んに敵愾心を鼓吹する。従つて世間の輿論は沸騰するという時代があつた。すると、私がずっと子

供の時分からもつていた思想の傾向——維新の志士肌ともいうべき傾向が、頭を擡げ出して来て、即ち、慷慨憂国というような輿論と、私のそんな思想とがぶつかり合つて、其の結果、将来日本の深憂大患となるのはロシアに極つてる。こいつ今の間にどうにか禦ふせいで置かなきゃいかんわい……それにはロシア語が一番に必要だ。と、まあ、こんな考からして外国語学校の露語科に入学することとなった。

で、文学物を見るようになったのは、語学校へ入つて、右のよくな一種の帝インペリアリズム国主義に浮かされて、語学を研究しているうちに自らその必要が起つて来たので。というのは、当時の語学校はロシアの中学校同様の課目で、物理、化学、数学などの普通学を

露語で教える傍ら、修辞学や露文学史などもやる。所が、この文学史の教授が露国の代表的作家の代表的作物を読まねばならぬよ  
うな組織であつたからである。

する中に、知らず識らず文学の影響を受けて来た。尤もそれには無論下地があつたので、いわば、子供の時から有る一種の芸術上の趣味が、露文学に依つて油をさされて自然に発展して来たので、それと一方、志士肌の齎もたらした慷慨熱——この二つの傾向が、当初のうちにはどちらに傾くともなく、殆ど平行して進んでいた。が、漸く帝国主義インペリアリズムの熱が醒めて、文学熱のみ独り熾さかんになつて来た。

併し、これは少しく説明を要する。

私のは、普通の文学者的に文学を愛好したというんじゃない。寧ろロシアの文学者が取扱う問題、即ち社会現象——これに対しては、東洋豪傑流の肌ではまるで頭に無かつたことなんだが——を文学上から観察し、解剖し、予見したりするのが非常に趣味のあることとなったのである。で、面白いということは唯だ趣味の話に止まるが、その趣味が思想となつて来たのが即ち社会主義ソシアリズムである。

だから、早く云つて見れば、文学と接触して摩すれ摩れになつて来るけれども、それが始めは文学に入らないで、先ず社会主義に入つて来た。つまり文学趣味に激成されて社会主義になつたのだ。で、社会主義ということは、実社会に対する態度をいうのだが、

同時にまた、一方において、人生に対する態度、乃至は人間の運命とか何とか彼とかい<sup>か</sup>う哲学的趣味も起つて来た。が、最初の頃は純粹に哲学的では無かつた……寧ろ文明批評とでもいうようなもので、それが一方に在る。そして、現世の組織、制度に対しては社会主義が他方に在る。と、まあ、源は一つだけ<sup>もと</sup>けれども、こんな風に別れて来ていたんだ。

社会主義を抱かせるに關係のあつた露国の作家は、それは幾つもあった。ツルゲーネフの作物、なかんずく就中『ファーズ・エンド・チルドレン』中のバザーロフなんて男の性格は、今でも頭に染み込んでゐる。その他チエルヌイシエーフスキー、ヘルツェン、それから露国の作家じゃないがラツサール、これらはよく読んだ

ものだ。

勿論、社会主義といったところで、当時は大真面目であつたのだが、今考えると、頗る幼稚なすこぶものだつたのだ。例えば、政府の施政が気に喰わなんだり、親達の干渉をうるさがつたり、無暗むやみに自由々と絶叫したり——まあすべての調子がこんな風であつたから、無論官立の学校も虫が好かん。処へ、語学校が廃されて商業学校の語学部になる。それも僅かの間で、語学部もなくなつて、その生徒は全然商業学校の生徒にされて了う。と、私はぷいと飛出して了つた。その時、親達は大学に入れと頻りに勧めたが、官立の商業学校に止まらなかつたと同様に、官立の大学にも入らなかつた。で、終しまには、親の世話になるのも自由を拘束されるんだ

というので、全く其の手を離れて独立独行で勉強しようというつもりになった。

が、こうなると、自分で働いて金を取らなきゃならん。そこであの『浮雲』も書いたんだ。尤も『浮雲』以前にも翻訳などはある。今もいったツルゲーネフの『ファーザース・エンド・チルドレン』の冒頭を、少々ばかり訳したことなどもあるが、坪内さんに見せたばかりで物にはならなかった。『浮雲』にはモデルがあったかというのか？ それは無いじゃないが、モデルはほんの参考で、引写しにはせん。いきなりモデルを見付けてこいつは面白いというようなのでは勿論無い。そうじゃなくて、自分の頭に、当時の日本の青年男女の傾向をぼんやりと抽象的に有<sup>も</sup>っていて、

それを具体化して行くには、どういふ風の形を取つたらよかろうか。といろいろ工夫をする場合に、誰か余所よそで会つた人とか、自分の予て知かねつてゐる者とかの中で、稍々うち自分の有もつてゐる抽象的觀念に脈の通うような人があるものだ。するとその人を先ず土台にしてタイプに仕上げる。勿論、その人の個インディビジュアル性ユアリティはあるが、それは捨てて了つて、その人を純化してタイプにして行くと、タイプはノーションじゃなくて、具体的なものだから、それ、最初の目的が達せられるという訳だ。この意味からだど『浮雲』にもモデルが無いじゃないが、私のいうモデルと、世間のそれとは或は意味が違つてゐるかも知れん。

兎に角、作の上の思想に、露文学の影響を受けた事は拒まれん。

ベーリンスキーの批評文なども愛読していた時代だから、日本文明の裏面を描き出してやろうと云うような意気込みもあつたので、あの作が、議論が土台になつてるのも、つまりそんな訳からである。文章は、上巻の方は、三馬ぼ、風来ふうらい、全交ぜんこう、饗庭あえばさんなどがごちや混ぜになつてる。中巻は最早もう日本人を離れて、西洋文を取つて来た。つまり西洋文を輸入しようという考えからで、先ずドストエフスキー、ガンチャロフ等を学び、主にドストエフスキーの書方に傾いた。それから下巻になると、矢張り多少はそれ等の人々の影響もあるが、一番多く真似たのはガンチャロフの文章であつた。

さて『浮雲』の話の序ついででだが、前に金を取りたい為にあれを作

つたと云った。然う云つて了えば生なまや優やさしい事だが、実はあれに就いては人の知らない苦悶をした事がある。

私は当時「正しょうじき直じき」の二字を理想として、俯仰天地に愧はじぎ

る生活をしたという考えを有もつていた。この「正しょうじき直じき」なる

思想は露文学から養われた点もあるが、もつと大関係のあるのは、

私が受けた儒教の感化である。話は少し以前に遡るが、私は帝インペ

国リアリズム主義の感化を受けたと同時に、儒教の感化をも余程蒙つた。

だから一方に於ては、孔子の実践躬行という思想がなかなか深く頭に入っている。……いわばまあ、上つ面の浮かれに過ぎないの

だけけれど、兎に角上つ面で熱心になっていた。一ちよつと寸、一例を挙

げれば、先生の講義を聴く時に私は両手を突かないじや聴かなん

だものだ。これは先生の人格よりか「道」その物に対して敬意を払ったので。こういう宗教的傾向、哲学的傾向は私には早くからあった。つまり東洋の儒教的感化と、露文学やら西洋哲学やらの感化とが結合つて、それに社会主義ソシアリズムの影響もあつて、ここに私の道徳的の中心観念、即ち俯仰天地に愧はじざる「正直しようじき」が形づくられたのだ。

併しこれは思想上の事だ。これが文学的労作と関係のある点はどうか。第一『浮雲』から御話するが、あの作は公平に見て多少好評であつたに係らず、私は非常に卑下していた。今でも無い如く、其当時も自信というものが少しも無かつた。然るに一方には正直という理想がある。芸術に対する尊敬心もある。この卑下、

正直、芸術尊敬の三つのエレメントが抱和した結果はどうかと云うに、まあ、こんな事を考える様になつたんだ——将来は知らず、当時の自分が文壇に立つなどは僭越至極、芸術を辱しむる所以である。正直の理想にも叶って居らん……と思うものの、また一方では、同じく「正直しようじき」から出立して、親の臍すねを噛つているのは不可いかん、独立独行、誰たれの恩をも被きては不可いかん、となる。すると勢い金が欲しくなる。欲しくなると小説でも書かなければならんがそいつは芸術に対して済まない。剩あまつさえ、最初は自分の名では出版さえ出来ずに、坪内さんの名を借りて、漸やっと本屋を納得させるような有様であつたから、是れ取りも直さず、利のために坪内さんをして心にもない不正な事を為させるんだ。即ち私が利用するも同然

である。のみならず、読者に対してはどうかと云うに、これまた相済まぬ訳である……所謂羊頭を掲げて狗肉を売るに類する所業しわざ、  
 厳しくいえば詐欺である。

之は甚ひどい進退維谷だ。實際的プラクチカルと理想的アイディアルとの衝突だ。で、そ

のジレンマを頭で解く事は出来ぬが、併し一方生活上の必要は益  
 迫つて来るので、よんどころなくも『浮雲』を作こしらえて金を取ら

なきやならんこととなつた。で、自分の理想からいえば、不埒な  
 不埒な人間となつて、銭を取りは取つたが、どうも自分ながら情  
 ない、愛想の尽きた下らない人間だと熟つくづく々自覚する。そこで苦  
 悶おのずかの極、自ら放つた声が、くたばつて仕舞しめえ（二葉亭四迷）！

世間では、私の号に就ていろんな臆説を伝えているが、實際は

今云つた通りなんだ。いや、「仕舞え！」と云つて命令した時には、全く仕舞う時節が有るだろうと思つたね。——その解決が付けば、まずそのライフだけは収まりが付くんだから。で、私の身にとると「くたばツて仕舞え！」という事は、今でも有意味に響く。そこでこの心持ちが作の上にはどう現れているかと云うと、実に骨に彫り、肉を刻むという有様で、非常な苦勞で殆ど油汗をしぼる。が、油汗を搾るのは責めては自分の罪を軽め度いという考えからで、羊頭を掲げて狗肉を売る所なら、まあ、豚の肉ぐらゐにして、人間の口に入れられるものを作え度い、という極く小心な「正直」から刻苦するようになったんだ。翻訳になると、もう一倍輪をかけて斯ういう苦勞がある。——その時はツルゲー

ネフに非常な尊敬をもつてた時だから、ああいう大家の苦心の作を、私共の手にかけて滅茶々々にして了うのは相済まん訳だ、だから、とても精神は伝える事が出来んとしても、せめて形など、原形のまま日本へ移したら、露語を読めぬ人も幾分は原文の妙を想像する事が出来やせんか、と斯う思つて、コンマも、ピリオドも、果ては字数までも原文の通りにしようという苦心までした。

今考えると随分馬鹿げた話さ。併し斯う云つて来ると、一図に「正直しようじき」に忠実だったようだが、一方には実は大矛盾があつたんだ。即ち大名誉心さ。……文壇の覇権手に唾して取るべしなぞと意気込んでね……いやはや、陋態ろうたいを極めて居たんだ。

その中うちに、人生問題に就て大苦悶に陥つた事がある。それは例

の「正直しょうじき」が段々崩されてゆくから起つたので先ず小説を書くことで「正直」が崩される、その他種々いろいろのことで崩される。つまり生活が次第に崩してゆくんだ。そして、こんな心持で文学上の製作に従事するから抄はかのゆかんこと夥しい。とても原稿料なぞじゃ私一身すら持もち耐えられん。況や家道は日に傾いて、心細い位置に落ちてゆく。老人共は始終愁眉を開いた例ためしが無い。其他種々いろいろの苦痛がある。苦痛と云うのは畢竟金のない事だ。冗くどい様だが金が欲しい。併し金を取るとすれば例の不徳をやらなければならん。やった所で、どうせ足りッこは無い。

ジレンマ！ ジレンマ！ こいつでまた幾ら苦められたか知れん。これが人生観についての苦悶を呼起した大動機になつてゐるん。

だ。即ちこんな苦痛の中に住んで、人生はどうなるだろう、人生の目的は何だろうなぞという問題に、思想上から自然に走つてゆく。実に苦しい。従つてゆつくりと其問題を研究する余裕がなく、ただ断腸の思ばかりしていた。腹に抛る所がない、ただ苦痛を免れん為の人生問題研究であるのだ。だから隙があつて道楽に人生を研究するんでなくて、苦悶しながら遣つていたんだ。私が盛に哲学書を獮あさつたのも此時で、キリストきよう基督教を覘のぞき、仏典を調べ、神学までも手を出したのも、また此時だ。

全く厭世と極つて了いっえば寧いっそ楽だろうが、其時は矛盾だったから苦しんだ。世の中が何となく面白くない。と云つた所で、捨てる訳にはゆかん。何となく懐しい所もある。理論から云つても、

人生は生活の価値あるものやら、無いものやら解らん。感情上から云つても同じく解らん……つまるところ、こんな煮え切らぬ感情があるから、苦しい境涯に居たのは事実だ。が、これは「厭世」と名くべきものじゃ無かろうと思う。

其時の苦悶の一端を話そうか。——当時、最も博く読まれた基督教の一雑誌があつた。この雑誌では例の基督教的に何でも断言してらう。たとえば、此世は神様が作ったのだとか、やれ何だとか、平気で「断言」して憚らない。その態度が私の癩しやくに触る。……よくも考えないで生意気が云えたもんだ。儂はかない自分、はかない制リミテッド限された頭脳ヘッドで、よくも己惚うぬぼれて、あんな断言が出来たものだ、と斯う思うと、賤あさましいとも浅猿あさましいとも云いようなく腹が

立つ。で、ある時小川町おがわまちを散歩したと思ひ給え。すると一軒の  
 絵双紙屋の店前みせさきで、ひよつと眼に付いたのは、今の雑誌のビラ  
 だ。さア、其奴そいつの垂れてるのを一寸瞥見したただけなんだが、私は  
 胸がむかついて来た。形容詞じゃなく、真実ほんとに何か吐出しそうに  
 なった。だから急いで顔を背そむけて、足早に通り抜け、漸やっと小間物  
 屋の開店だけは免れたが、このくらいにも神経的になつていた。  
 思想が狂つてると同時に、神経までが変調になつたので、そして  
 其拳句が……無茶さ！

で、非常な乱暴をやつちまつた。こうなると人間は獸アニマル的嗜慾アペタイト  
 だけだから、喰うか、飲むか、女でも弄もてあそぶか、そんな事よりしか  
 しない。——一滴もいけなかつた私が酒を飲み出す、子供の時に

は軽薄な江戸ツ兒風に染まって、近所の女のあとなんか追廻したが、中年になつて真面目になつたその私が再び女に手を出す——全く獸的生活に落ちて、終には盜賊だつて関わないとまで思つた。いや、ほんと 眞実なんだ。

が、そこまでは豈夫まさかに思い切れなかつた。人生は無意味ノンセンスだとは感じながらも、俺のやつてる事は偽うそだ、何か光明の来る時期がありそうだとも思う。要するに無茶さ。だから悪い事をしては苦悶する。……為しは為ても極端にまでやる事も出来ずに迷つてる。そこでかれこれする間に、ごく下等な女に出会つた事がある。私とは正反対に、非常な快活な奴で、鼻唄で世の中を渡つてるような女だつた。無論浅薄じゃあるけれども、其処にまた活々とし

た処がある。私の様に死んじや居ない。で、其女の大口開いてアハハハと笑うような態度が、実に不思議な一種のアツトラクション引力力を起させる。あながち惚れたという訳でも無い。が、何だか自分に欠乏してる生命の泉というものが、彼女には沸々と湧いてる様な感じがする。そこはまア、自然かも知れんね——日蔭の冷たい、死というものに掴まれそうになつてる人間が、日向ひなたの明るい、生氣澆漑たる陽気な所を求めて、得られんで煩悶している。すると、議論じや一向始末におえない奴が、浅墓じやあるが、具体的に一寸眼前に現でて来ている。——私の心というものは、その女に惹き付けられた。

これが併し動機になつたんだ。勢い極まって其処まで行つたん

だが、……これが畢竟つまり一転する動機となつたんだ。

で、私はこんな事を考えた。——斯ういう風に実例を眼前に見て、苦しいとか、楽しいとか云う事は、人によつて大變違ふ。例えば私が苦しいと思う事も、其女は何とも思わんかも知らん。それはまア浅薄で何とも思わないのだが、浅薄でなくてしかも何とも思わん人もある。それは誰かと云うに、孔子さんだろうと思う。悠々として天命を樂むのは実に豪えらい。例えば「死」なる問題は、今の所到底理論の解決以外だ。が、解決が出来たとした所で、死は矢張り可厭やっぱだいやろう。ただ解決が出来れば幾分か諦あきらめが付き易い効はあるが、元來「死」が可厭いやという理由があるんじゃないから——ただ可厭いやだから可厭いやなんだ——意味が解つた所で、矢張り何時

迄も可厭いやなんだ。すると智識で「死」の恐怖を去る事は出来ん。死を怖れるのも怖れぬのも共に理由のない事だ。換言すれば其人の心メンタルトーン持にある。即ち孔子の如き仁者の「氣象」にある。あ  
あ云う聖人の様な心持で居たらば、死を怖れて取乱す事もあるま  
い。人生の苦痛に対しても然り、聖人だつて苦痛は有る、が、そ  
の間に一分の余裕があつて取乱さん。悠々として迫らぬ氣象、即  
ち「仁」がある。だから思想上で人生問題の解決が付くか否か解  
らんが、一方で人間に「仁」の氣象を養つたら、何となく人生を  
超絶して、一段上に出る塩あんばい梅で、苦痛にも何にも捉えられん、  
仏者の所謂自在天に入りはすまいかと考えた。

そこで、心理学の研究に入った。

古人は精神的に「仁」を養つたが、我々新時代の人は物理的に養うべきではなからうかという考になつた。

心理学、医学に次いで、生理心理学を研究し始めた。是等に関する英書は随分蒐めたもので、殆ど十何年間、三十歳を越すまで研究した。呉博士と往復したのも、参考書類を読破しようという熱心から独逸語を独修したのも、此時だ。けれども其結果、どうも個人の力じや到底やり切れんと悟つた。ヴントの実験室、ジエームスの実験室、其等が無ければ、何時迄経つても眞の研究は覚束ないと思ひ出した。そんなら錢の費らん研究法をしなくてはならんが、其には自分を犠牲にして解剖壇上に乗せて、解剖学を研究するより外仕方がない。当時は、医学上の大発見の為に

毒薬を仰いだりした人の話が頭にあつたから、そんな犠牲心も起したんだ。即ち私の心的マインドスタッフ要素を種々の事情の下に置いて、揉み散らし、苦め散らし、散々な実エクスペリメント験を加えてやろう。そのしたら、学術的に心持メンタルトーンを培養する学理は解らんでも、その技術アートを獲えることは出来やせんか、と云うので、最初は方面を撰んで、実業が最も良かろうと見当を付けた。それで、実業家と成ろうと大分焦つた。が併し私の露語を離れ離れにしては実業に入れぬから、露国貿易と云うような所から段々入ろうと思つた。そして国際的關係に首を突込んで、志士肌と商売肌を混ぜてそれにまた道徳的のことも加えたり何かして見ると、かのセシルローズなぞが面白い人物と思われるようになった。単に金持うらやまが羨しいんじ

やない。形は違うが、一つああいう風の事業をやろうと云うのを見当としてそんな方面にも走つた事がある。で、私の職業の変遷を述べれば、官報局の翻訳係、陸軍大学の語学教師、海軍省の編輯書記、外国語学校の露語教師などという順序だが、今云つた国際問題等に興味を有つもに至つて浦塩うらじおから満洲に入り、更に蒙古に入ろうとして、暫時警務学堂に奉職しばししていた事なんぞがある。

が、これは外面に現れた事実上の事だ。その心的方面を云うと、この無益やくざな心的要素マインドスタッフが何れ程まで修練を加えたらものになるか、人生に捉われずに、其を超絶する様な所まで行くか、一つやツて見よう、という心持で、幾多の活動上の方面に接触している

と、自然に、人生問題などは苦にせず済む。で、この方面の活

動だと、ピタツと人生にはまツて了つて、苦痛は苦痛だが、それに堪えられんことは無い。一層奮闘する事が出来るようになるので、私は、奮闘さえすれば何となく生き甲斐があるような心持がするんだ。

明治三十六年の七月、日露戦争が始まると云うので私は日本に帰つて、今の朝日新聞社に入社した。そして奉公として「其面影」や「平凡」などを書いて、大分また文壇に近付いては来たが、さりとて文学者に成り済ました気ではない。矢張り例の大活動、大奮闘の野心はある——今でもある。

(明治四十一年六月「文章世界」)



# 青空文庫情報

底本：「平凡・私は懷疑派だ」講談社文芸文庫、講談社

1997（平成9）年12月10日第1刷発行

底本の親本：「二葉亭四迷全集 第一、二、三、四、七卷」筑摩書房

1984（昭和59）年11月～1991（平成3）年11月

入力：長住由生

校正：もりみつじゅんじ

2000年5月4日公開

2006年3月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 予が半生の懺悔

二葉亭四迷

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>